

バレーボール学習の小学生への導入について —ミニソフト球、軽量球、公認球による学習成果の比較から—

○長井 功 (兵庫教育大学大学院) ・後藤 幸弘 (兵庫教育大学)

小学生 バレーボール学習 ボール 学習成果

I. 目的

バレーボールは、空中でボールを落とさずにつなぎ合うという「ボレー操作」にその特徴をもち、集団としての連携プレーや仲間との協力が必然的に要求されるスポーツである。また、類反射に抗した型で空間領域のボールを扱う動きが要求され、このような動作は児童期において身につけておく必要があり、小学校体育教材にバレーボールを位置づけることは意味あるものと考えられる。

また、立場は若干異なるが、近年、小学生にミニソフト球を用いたバレーボール学習の実践報告がみられる(吉川ら:1996, 市川:1997)。ミニソフト球は、軽量で柔らかい素材が利用されているため、初心者には扱いやすく、運動の苦手な子も楽しめると思われているが、技能的特性に触れる楽しさを味わわせることができているのかについては、十分に明らかにされていない。

そこで、本研究では、ミニソフト球、軽量4号球、公認4号球のそれぞれを用いて、指導過程を同一にした学級を実験的に設定し、使用ボールの相違による学習成果の比較から、小学校体育科へのバレーボール学習の導入について検討した。

II. 方法

小学4年生44(男:26, 女:18)名, 5年生109(男:57, 女:52)名, 6年生119(男:57, 女:62)名を対象に、それぞれミニソフト球、軽量4号球、公認4号球を用い、ゲームを中心とした12時間のバレーボール授業を一人の教師が実施した(4年生は公認球使用)。

その際、公認4号球を用いて、①オーバーハンドサークルパス回数、②アンダーハンドサークルパス回数、③オーバーハンドパス距離を、単元「はじめ」「なか」「まとめ」の3回測定した。また、ゲームをVTRに収録し、①ラリー回数、②サーブ成功率、③サーブ得点率、④サーブ継続率、⑤触球回数を分析するとともに、パスソシオグラムやゲーム発展指数⁽¹⁾を用い、集団的技術の学習成果を評価した。

さらに、高田・小林の「よい体育授業への到達度評価」を参考に作成したアンケート調査と認識度評価テストにより、情意的側面ならびに認知的側面の学習成果を把握した。

$$E) \left(\frac{\text{サーブ継続率} + \text{ラリー回数} + \text{平均触球回数}}{47.2 + 0.76 + 1.20} \right) \times \frac{1}{3} \times 100$$

で示される指数で、100を越えるとゲームを楽しめるようにゲーム様相(集団的技術)が発展していると考えられる。

III. 結果ならびに考察

1. 技能的側面の学習成果

a) 個人的技能

オーバーハンドサークルパス、アンダーハンドサークルパスの平均回数は、使用ボールにかかわらず、いずれの学年においても、単元経過に伴って向上が認められたが、その伸び方に相違がみられた。すなわち、公認球と軽量球を用いた場合には段階的な伸びを示したが、ミニソフト球では単元前半に顕著な向上がみられたものの、その後、伸び悩みが認められた(図1)。

b) 集団的技術

先行研究(長井ら, 1997)で明らかにされた「バレーボールゲームを楽しみと感じ得る各種のスキルレベル」の通過率は、4

年生では使用ボールにかかわらず、50%を越えなかった。しかし、5年生ではミニソフト球ですべての項目が50%を、6年生では公認球においてもほとんどの項目で50%を越えることが認められた。

また、ラリー回数、サーブ継続率、および平均触球回数の単元後の伸びは、4年生ではミニソフト球で最も大きかったが、学年進行に伴い、ミニソフト球での伸びが小さくなり、公認球を用いた場合に最も大きくなることが認められた(図2)。

一方、単元終了後におけるゲーム発展指数は、いずれの学年においてもミニソフト球を用いた場合が最も高く、5年生のミニソフト球では100を越え、6年生ではいずれのボールを用いた場合にも100を越えることが認められた。しかし、5年生のミニソフト球を用いた場合のゲーム様相をパスソシオグラムからみた場合、チーム全員での意図的なものではなかった。

これらのことから、6年生でバレーボールの技能的特性に触れることができると考えられた。

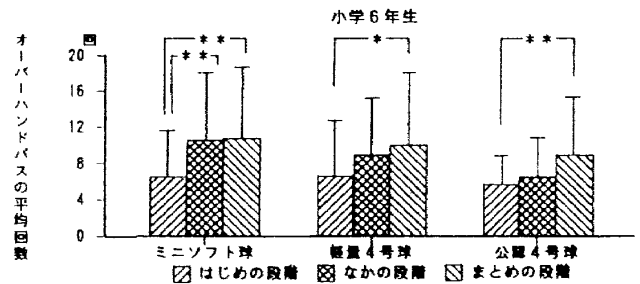


図1. オーバーハンドパス回数の単元に伴う変化

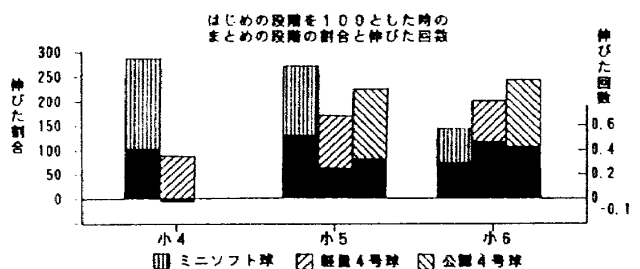


図2. ラリー回数の学習による伸び(回数と伸び率)の比較

2. 情意的側面の学習成果

「活動欲求」「技術向上」「発見工夫」「協力連帯」のいずれにおいても、量的な側面では、学年、使用ボールにかかわらず、単元経過とともに向上が認められ、4年生ではミニソフト球を用いた場合の方が高かった。しかし、学年進行に伴い、使用ボールによる差異は僅少になる傾向がみられた。一方、質的な側面では、高学年で「技術向上」の内容に差異が認められた。

IV. まとめ

小学生においても、6年生であれば、バレーボールの技能的特性に触れさせることができると考えられた。

また、ミニソフト球使用の有効性が認められたが、ミニソフト球で習得した技術は、必ずしも公認球に汎用され得ないことが推察された。